

LNG 17

神鋼リサーチ㈱ 上原 一浩、室尾 洋二

LNG に関する国際会議は、1968 年米国シカゴで開催された LNG1 から生産国と消費国の間で 3 年おきに開催されている。今回の LNG17 は、2013 年 4 月 16 日から 19 日まで米国ヒューストンで開催された。

参加者は、80 ヶ国から、のべ 5000 人以上（日本からの参加者はおよそ 400 名）と前回の約 2 倍の大幅増加となり、大盛況であった。

3 日間の会議は、ホットな話題を提供するスポットライトセッション、LNG 市場・技術動向／新規プロジェクト・展開中のプロジェクト進捗状況などのテーマ別セッション、およびポスターセッションから構成されており、8：30～18：00 までの非常に充実したプログラム構成であった。

初日と中日には、LNG 受入基地として建設されたが、シェールガス革命によって、余剰なガスを液化し、輸出するターミナルへと様変わりしつつある Sabine Pass LNG ターミナル基地の現地見学会が 4 回行われたが、いずれも完売するほどの人気であった。



LNG17 オープニングセレモニー

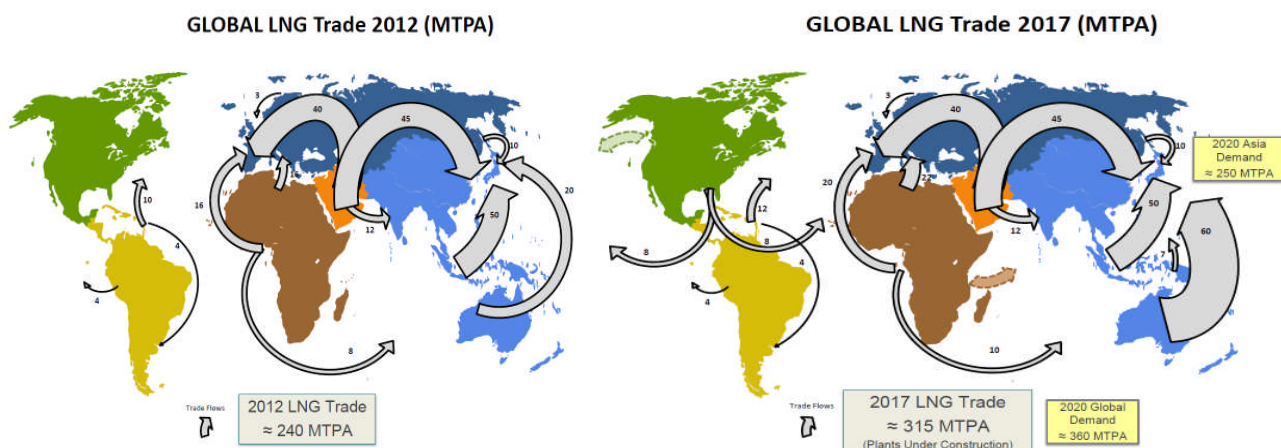


展示場

今回の会議の最大の関心事は、米国のシェールガスの余剰ガスが LNG として輸出可能性が高まっているが、『いつ頃、どれくらいの量がどの国に輸出されるか?』ということであった。

米国における天然ガスの価格は、MMBtu (百万英国熱量単位)あたり、およそ 3~4 ドル、欧州では、およそ 11 ドル、日本では、およそ 16 ドル程度である。しかし、下図に示すように、2017 年から米国から東アジア地域への LNG 輸出が始まると、価格競争の影響がグローバルにどれくらいおよぶのか?ということは、現在、天然ガスや LNG 輸出で外貨を得ようとして新規プロジェクトを立ち上げているアフリカ諸国や既に輸出によって外貨を稼いでいるロシアにとっては、極めて重要な問題であることを改めて痛感した。

また、グローバルな LNG 需要・供給先の多様化のもたらす影響としては、北米、東南アジア、インドなどに LNG 輸出基地や輸入ターミナルの多数の建設計画や構想が出てきている。



グローバル LNG 貿易 (LNG17 から引用)

今回の会議におけるトピックスのいくつかを以下に紹介する。

(1) 北極海における石油・天然ガス資源開発

北極海地域は、世界の未確認炭化水素の 25%を占めるといわれており、Pechora 海、アラスカ、ニューファンドランドのグランドバンクおよびバレンツ海などで、大規模な石油・天然ガス開発が展開されている。

(2) 洋上 LNG (FLNG) / 洋上再ガス化ユニット (FSRU)

東南アジア地域のオフショアの中小規模のガス田では、船上で天然ガスを液化し、貯蔵する FLNG や 陸上に LNG 貯蔵タンク用の広い土地確保が困難な場合、船内に貯蔵タンクをもち、船上に設置した気化器で再ガス化して地上のパイプラインへ送る FSRU というオプションが計画されている。

(3) 運輸分野での LNG 燃料の拡大

欧米では、LNG を船泊の燃料として利用する「LNG 燃料船」をはじめ、大型トラック、鉄道機関車などへの燃料として利用する実証試験やプロジェクトが展開されている。この後の進展には注目する必要がある。

最後に、今回の LNG17 に参加することによって、LNG ビジネスは、大きな転換点を迎えてつあることを肌身で感じることができ、貴重な経験となった。

以上